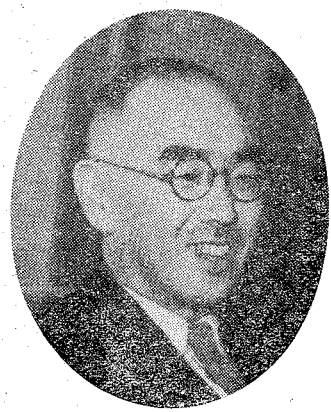
歷代內務土木局長と其時代（十七）

——湯澤三千男氏——

清水生



國家の要望するところ

米國の前陸軍長官であつた、デーヴイス氏の計算するところによると今日の一軍隊が完全に武裝するに要する物資の種類は實に三千五百餘種の多きに上り又一兵卒の戰時に於ける物資の消費量は平均一日に二噸に及ぶと云ふ驚くべき莫大なる數字を以て縷々詳論してゐるが又某軍事專問家が云ふところによると近代戰に於ける兵隊一人の鐵消費量は一ケ年三萬噸に達するとのことである、この一事を見ても戰爭といふものは尨大の物資を消費するから從つて驚くべき多量の物資を必要とすることは今更絮說するまでもない、殊に其の中に足を踏み入れてゐる我國は支那事

變といふ當面の戰爭を遂行するために必要な一切の物資を充足することであり更に進んで我國は永遠に光輝ある存續をして行くためには四圍の國際情勢に對應して所謂高度國防國家の建設は如何なるものを犧牲にするも完遂せねばならぬ國家生死の岐るゝところの國家的重大使命である。故に現下我國の國內情況は一億一心相協力して一品でも多く物資を生み出すことにある。換言すれば各人は職域奉公以てこの國家の要求に一層奮鬪努力以てこれに答へることにある。……全國產業戰士約四百七十萬人が一致團結して……「我等は國體の本義に徹し全產業一體報國の實を擧げ以て皇運を扶翼し奉らんことを期す、我等は產業の使命を體し事業一家職分奉公の誠を致し以て皇國產業の興隆に總力を竭さむことを期す、我等は勤勞の眞義に生き剛健明朗なる生活を建設し以て國力の根柢に培はむことを期す」といふ綱領を天下に發表して、大日本產業報國會が生れたのも畢竟現下我國情に鑑みて國家の切に要求する重大使命を達成せんと欲する赤心の發露であらう、この產業報國會には厚生大臣が總裁としてこれに臨み會長としては平生釟三郎氏がなつてゐる、其他に顧問理事評議員には政界並に財界產業界に錚々たる人物と云はれる人々が顏を揃べてゐる。併し會務一切を處理し、その實際運用の重責に當るものは理事長の職であるがこの職には全會員の輿望に依つて湯澤三千男氏が就任してゐる。

氏はどういふ經歷の人か

然らば湯澤三千男氏はどういふ人かと思ふてその經歷を見ると、……氏は東武鐵道の新鹿沼驛から約四里半も入つた山間の僻村である栃木縣上都賀郡加蘇村で加蘇山神社の神官である湯澤義厚氏の次男として明治二十一年五月二十日に產聲を擧げてゐる、海東秀人氏の氏について書いてゐるところによると。

加蘇山神社といふところは昔關東八州並びに奧羽方面からの參拜者が多くて、夏などは二、三萬人もあつたとのことであるが當時五軒の神官の家があつて、それがそれ〴〵宿坊を兼ねて參拜者を泊めてゐたそうである、湯

澤家も間口十八間大黑柱も周圍六尺もあるぐらゐな非常に大きな家である、氏が少年の頃は神官の家も湯澤家一軒となり收入も少くなつたので暮し向きは左程樂ではなかつた。

と云つてゐるが、兎も角氏は田舍の小學校を出てから丁度氏の令兄眞太郎氏が內務省に奉職して東京に一家を持つてゐたから令兄を賴つて上京し當時神田にあつた開成中學校に通學し、更に進んで第一高等學校次いで東京帝國大學に入つたが、恰も氏が帝大に入學する時に法學部に經濟科を新設されたので、氏はこの經濟科に籍を置いて明治四十五年同科を優秀な成績で卒業してゐる、次いで高等文官試驗に合格したが、當時水野錬太郎氏が地方局長であつたので、令兄眞太郎氏から水野氏に賴んで內務畑に採用してもらい、最初は福島縣屬兼警視で赴任してゐる、これが氏が官界に足を入れた一歩である、それから福井縣の足羽郡に廿六歳の全國中最年少の郡長として就任し次いで同縣廳の地方課長を勤めてゐるうち、本省に呼ばれて內務書記官や調査課長、社會局保險課長等を歷任してゐる、大正十年萬國衞生會議が開かるゝに當つて列席のために歐米各國に出張を命ぜられ、歸朝後は社會局保險部長に昇進して僅か三十九歳の若年で同級生の群を拔いて勅任官となつてゐる、次いで勞働部長の時、昭和三年ジュネーヴで開催された第十二回萬國勞働會議に氏は再び政府代表として歐米に赴いたが歸朝後は宮城縣知事として赴任してゐる、昭和六年十二月十三日犬養內閣が若槻內閣に代つて出來ると氏はその五日後の同月十八日に宮城縣知事から再び本省に戻つて土木局長に就任したのである。

當時の內務首腦部の顏觸れ

當時の內務首腦部の顏觸れを見ると、內務大臣は中橋德五郎氏で次官は河原田稼吉氏であつた、地方局長には大野錄一郎氏警保局長には森岡二郎氏神社局長には石田馨氏衞生局長には大島辰次郎氏と云ふやうな面々であつたが、氏の土木局長在任は翌昭和七年六月廿八日まで約半歲であつた、この間に內閣は首相犬養氏が例の五・一五事件で倒れる

や高橋是清氏が短期間首相の印綬を帶びたが間もなく海軍大將で嘗て朝鮮總督であつた齋藤實氏に大命は降下されて氏を首班とする齋藤内閣であつた、そうしてこの内閣には山本達雄氏が内務大臣として臺閣に列してゐる、次官は潮惠之輔氏であつた、この時湯澤氏は廣島縣知事に轉じ次いで兵庫縣知事となつたが昭和十一年三月に廣田内閣の出來るや潮氏が内相となるに及んで、氏はその女房役である次官となり翌十二年二月内相の退官と共に氏も亦次官の職を辭したのであつた、其後暫らく浪人生活をしてゐたが、これも僅かで昭和十三年三月に北支派遣軍顧問兼北京臨時政府の行政顧問として北支主として北京で活躍してゐたが翌十四年十月に辭して歸朝昨冬大日本産業報國會が結成さるに至つたので氏は推されて理事長の重任を擔うたのである。

兄天眞氏の見た湯澤氏

これが大體湯澤三千男といふ人の略歴とでも云へよう、そこで筆者は漢詩人として知られてゐる、氏の令兄眞太郎翁の弟にして養子になつてゐる氏をどういふ風に見てゐるかと思ふて或る日知友平井洮民氏の紹介で赤坂豐川稲荷の直ぐ前にある令兄天眞氏の邸を尋ねて見た、天眞とは眞太郎翁の別名である、玄關で取次の書生に來意を告げると早速應接室に通された、待つこと暫時にして白髮一見氣骨隆々であるが、そのうちどこかに人情味が溢れてゐる感じをした天眞翁は「お待たせ致ました」と云つて現はれたので、筆者は簡單に再び來意を述べると翁は笑ひながら。

弟は「三千男氏のこと」學校時代は學校の勉强は嫌いで文學や哲學や其他學校以外の書物を克く讀んでゐたが、私は不干涉主義であつたから別段小言も言はずにして居つた、丁度弟が大學に入る時には帝大の法科に經濟科が出來た最初であつたので弟は夫れに入いつたやうな次第であつたが、前述のやうにあまり學校の方は勉强せんから一二年の時は成績もよくなかつたやうであつた、夫れでも三年と四年には別人のやうになつて學業に身を入れた、ためか非常によい成績であつたから卒業の時は在學四ケ年間通じての平均點は相當によくて結局まあ…

辛うじて優等といふ方で大學を出たやうな始末であつた學校を出てから弟は實業界に入るつもりで世話する人があつて三井の同族會社に入ることになつてゐたが、その時に弟は希望として採用後は洋行させて貰うこと、と、大學院に入れて貰うこと、と、を云つたら洋行は兎も角實業家になるのには大學院に入る必要はない、とのことであつたそうだが、兎も角採用すると云ふことであつた、ところがそのことを土岐嘉平さんに相談したら、實業界に行くことも惡くはないが、人格を修養するにはまだ官界が比較的によい場所であるから官界に行つたらどうだと云ふことであり、それには高文試驗を通過せんと行かんとのことであつた、これには私も全然同意見であつた、兎も角高文試驗を受けたら確か二百何人か及第した內で七番の成績であつたように記憶してゐる、當時私は本鄉の金助町に宅を構へてゐたが、家內は病氣でウンウンうなつてゐるし、弟は犬にかまれたといふて治療をしてゐたで今年の高文受驗はやめにしたと云つてゐたが、私はそうんなことを云はずに既に受驗手續までしてあるのだから例ひやりしくじつても多少何等の經驗にもなるだらうから受けて見るがよいと云つて勸めたのであつた、それならばと云つて受けたのであつたが今云つたやうなよい成績でパスしたやうな有樣であつた。刑法の如きは經濟科ではなかつたから從つて一番六ケ敷かろうと私は思ふてゐたが、一晩で刑法書を讀んでこれも亦相當の成績を取つてゐる。

私財一萬圓放出す決心

そこで土岐サンが當時地方局長であつた水野サンに依賴してくれて官界入りをなし最初は福島縣の屬兼警視といふことになつたのであつたが、勿論手當は屬官が本職であつたから屬官の俸給を貰らつてゐた、當時の知事は西久保弘道サンで河原田稼吉氏がその下で警察部長であつたが、この緣でか河原田サンが後ちに內相になられた時に弟に是非共次官に留任してくれとの話しであつたが、弟は潮サンにすまないと云ふのと若し河原田サンの

下に次官になつて議論が分かれた時には却つて河原田サンが十分に働くことが出來ぬからと云つてどうしても次官に留任せなんだやうであつた、話は元に戻るが夫れから福井縣に轉じたが、その時は民政黨の大隈内閣であつて、佐藤孝三郎といふ人が知事で弟は二十六歳の若さで同縣足羽郡長に任命されたが、その時弟は郡長などといふ職は大抵老朽の人のやることで自分のやうな若いものは到底勤まるものではないと云つて固辭したのであつたが、最後に命令であると云ふことであつたので弟は水野サンに相談したところ水野サンの云はるゝのは秘書官の命令に反することは官界に居てよくない、若い者が郡長をやるのも修養の一つになるからと云はれたので郡長になつたやうな次第である、こゝで弟は一つの難問題に遭遇したことがあつた、それは麻生津川の改修工事の解決であつて、この問題は二三代前の知事が皆な手を燒いて未解決の儘であつたが、佐藤知事が赴任して來ると是非共この問題を解決しやうと決心をして取係つたのであつた、全體この麻生津川の水害は毎年約四千町歩に及んでゐるために内務省は直轄工事でやつてゐる、日野川改修工事の附帶事業として水路を隣郡につけ替へたりする關係上隣郡の反對がやかましいので歴代の知事も困り拔いて居たのであつた、ところが弟が足羽郡長となつたので縣廳側ともよく打合せの上足羽郡内の關係町村から相當の金を集めて、これを見舞金として隣郡に出し尚ほこれでも隣郡が應じない場合は縣としても斷乎土地收用法を適用して强制工事の方法によつて解決するより他に良法がないと決心したのである、夫れで弟は足羽郡の關係町村に一萬圓の見舞金支出に付いて相談したところ中々出そうとはせないので弟はそれなら父から一萬圓分けて貰らつて出すと腹を定めてゐたが、そのことが内務省に聞こゑ又關係町村にも傳へられて郡長が何も自分の金まで出す必要がどこにあるかと云ふことになつて、これが動機で却て改修を促進したやうなこともあつた。

と令兄天眞翁は此の性格や其他に付いて種々語つたあ

とに尙も言葉をついで。

警察部長叱らる

其後弟は縣廳に入つて地方課長となつて佐藤知事の片腕となつて働いてゐたが、內閣が代つて政友會內閣になると川島純幹といふ人が知事となつて佐藤氏に代つて來た、この人は非常に性短急の人であつたやうで佐上信一サンから今度の知事は何んでも云ふことをテキパキやらんと機嫌も悪いし又認められないからとの注意を受けてゐた、川島知事が赴任して間もなく警察部長と弟を呼んで自分は地方長官會議に出席のためこれから上京する。それで歸縣するまでに警察の訓示地方課所管の訓示の原稿を夫々起草して置くやうにと命令して上京したがこれだけ云つただけで、その內容も語らず從てどう云ふことを訓示するとの指圖も何んにも云はなかつたのであつたそうだ、ところが弟は自分に考へて草稿を作つて置いたが、知事が歸廳後警察部長と弟を呼んで訓示の原稿が出來て居るかとのことであつた、夫れで弟は兎も角草稿を出して見せたが夫れでよいと云ふことであつたが、警察部長は訓示の草稿を作れと云ふことは受承つたが其の內容の御指圖がないから伺つた後ちにと思うて未だ何等作つて居りませぬと答へると、川島知事は地方課長は既に出來てゐるにと云ふて大變警察部長を叱つたやうであつたそうだ、こういふこともあつて弟は前の佐藤知事同樣に新任知事の川島純幹氏にも大變愛されたやうであつた。

と、令兄眞太郎翁の舍弟三千男氏に關する話しはいろいろと續き、氏が勞働會議に列席のために歐米に赴いたときこの會議に列席するために各國から來てゐる人々は夫々その隨行員までも招待するのに氏は經費の關係上思ふやうに行かぬので、それがために氏が個人で逆爲替を送つて信用貸りをして私費で向ふの隨行員等まで招待したことや其他に付いて語られたがそのあとに次いで。

弟は兵庫縣知事に赴任した時に官民多數が集つまつて常盤花壇で盛大な歡迎會を催してくれた、その時に弟は

宴半ばにして立ちて「知事といふ職業は却々多忙のものである、皆樣に何れ答禮したいと思ふてゐるが思ふやうに餘暇を見出すのは困難かも知れぬ、故に今日これから私に答禮の意味で改めてこの會を受け持たして貰らいたい」と云つて、これから直ちに主客顚倒して返禮の會に移り弟は劍舞をやるやら歌を唱ふやら大變陽氣になつて大騷ぎをやつた、そこでその席に居つた元老藝者連は驚いて知事サンの宴會などはこのやうに陽氣にザツクバランに行かぬものじやが、今度の知事は大變にかわつてゐると云つて驚いたようなこともあつた。

そこで筆者は氏の性格等に付いて尋ねたら弟の性格は一言にして云はば赤裸々で所謂ザツクバランと云つてよいだらうとのことであつた、令兄天眞氏の談はまだ〳〵書くことがあるが大體この位にして置いて。

水野氏に聞く

今度は筆者は湯澤氏を始めて官界に採用したのは水野錬太郎氏であつたから水野氏の見る湯澤氏はいかなる人かこれも亦一興であると思つたので芝高輪の水野邸を訪ふて親しく聞くを得たのである。

湯澤氏の家は代々神官を勤めた家柄であつて、三千男氏の令兄に當る眞太郎氏は永く內務省にゐたから自然懇意にしてゐた、氏は號を天眞と云つて漢詩は却々克くし又笛等も上手である、人と成なりは眞面目で氣骨のある人であるが湯澤三千男氏はこの人の令弟であつて東京帝大も高文試驗もよい成績で及第した位の俊才である、私は內務省に居る時にこの天眞氏に依賴されて採用したのであつたが氏は官界に入つても到る處よい成績を收めて出色した人の一人であつた。

と、水野氏は語られたあとに。

湯澤氏はこれまで政治的にはあまり活動したことがないが單純なる事務官ではなく地方に居た時も本省に居た時も各方面に活動してゐた、官界を退いてから北京の方から囑望されて北京の臨時政府の顧問として約一ケ年半程彼地に於て活躍してゐたが常に大局に着眼して、こせ

〳〵しない何所かに大なる素質を備へてゐる、以來浪人をしてゐたが、協調會の理事にもなつて大に社會問題にも盡してゐた、現在は大日本産業報國會の理事長に推されてこの非常時局に産業報國の一大使命の下に活動してゐるが氏に負ふところは大であらう云々。

これが水野氏の筆者に對して語つたところであつた。

湯澤氏と初對面の印象

兀來五百年に只一人若くは千年に只一人と稱せらるゝ古今無比の英雄ならばいざ知らず、只だ單に大學を出て高文試驗を優秀な成績でパスして、順風に帆を擧げて官界を一歩〳〵と昇進した位のことなれば敢へて云ふ程のことではない、世の所謂屬僚の少し羽の生へた人物位と思ふのは筆者のみならず恐くは何人も左樣思ふのであらう、併乍らそのうちには凡傭を拔いて時々ダイヤモンドが光るやうな人物もゐる、果して湯澤氏は如何なる人物か……筆者は相當興味と期待をかけて某日産業報國會本部の或る一室に初對面をした。その筆者に殘る印象は勿論明治維新の英傑西鄕や木戸や大久保は偖て置き伊藤や山縣や品川等にも及ばない、明治時代に於ける桂や小村や原等の人物には其の膽力に於てその力量に於て比較するのはどうかも知れんが、先づこの頃の順風に帆を擧げた行政官中には出色した人物であるとの感を深くした、殊に實に氣持のよい愉快な人といふ感を起すには十分であつた恰も多忙の氏が僅かの時間で筆者に語るところを聞いて居つてもこの人は大局を達觀して常に大乘的見地から相當識見もあり抱負もあり且强き實行力に富んでゐる人であると思はれたのであつた、いろいろ話を聞いてゐるが、直面して見ると案外の人材であり所謂現代人物拂底の際には一層光つて居ることが判つたのである。

某氏は氏をかやうに言つてゐる

氏が土木局長として廣島縣知事から內務省に來た時に氏を克く知れる某氏は氏の人物に付いて。

今度の新任局長である湯澤氏は當年取〳〵こ四十三歲の男盛であつて十有四年間內務省に勤めてゐたから此度

の轉任は元の古巣に歸へた形だ。殊に氏は官海への首途に土木課の仕事に從事されたから土木局としては何んとなく懷し味がある、氏に一度接した人は明かるい人である、夫れに頭腦明敏で事務を處理すること頗る速い、溫厚の質たが時と場合に依つては單騎敵地に乘んで奮鬪するの氣概の持主であると。

氏の性格を述べて更にこれを具體的に例を擧げて。

嘗て衞生局長時代に明治神宮の競技問題で文部省を向へ廻して一大論戰をやつたことや、社會局保險部長時代に全國醫師會との間に醫療報償金値上げ問題で紛糾したとき契約破棄を覺悟して現狀維持を固執し內相の仲裁を容易に肯じなかつたことは今尙同僚間に有名な話しである。

と、かやうに云つてゐるが、これを見ても氏は凡庸の人でないやうに思はれる、一面に於ては溫讓と他面に於ては意志の强固なところがある。

湯澤氏と語る

僕が土木局長であつた期間は僅かであつたから從つて何等これといふ仕事も出來なかつたが。

と前置して氏は。

思ひ出せばあの時に大和川の大きい地滑べりがあつて奈良一帶が水浸しになるやうな次第であつた、この大地滑べりは普通の地滑べりと違つて土地が持ち上つて中々の大騷ぎであつたよ……そこで速かにこれが疏水工事をやらなければならぬから工費豫算百五六十萬圓で主として當時大阪の土木出張所長であつた坂本助太郎氏がその衝に當つたのであるが、この工事を地元の代議士等は受負せたがよいと鈴木內相に進言したものじやが、中々この工事は例がなく六ケ敷しいので……工事をなしつゝ考へてやつて行くと云ふ有樣でまあ然し遂に成功して疏水も克くなり水浸しになる心配もなくなつた。

と氏はこの大和川の大きい地滑べりに付いていろ〳〵語られた、次いで筆者の問に對して。

僕は土木局長時代に丁度蘇聯か彼の產業五ケ年計畫を

始めて間もない時であつたが、何もそれを似ねする譯けでもないが、產業振興のために三億八千萬圓の土木五ケ年計畫を立てゝこれに臨んだものであつた、當時內相は中橋德五郎氏で政務次官は松野鶴平氏で事務次官は河原田稼吉氏であつたが、僕は或る日大臣にこれを承認して貰らいたいと云つて持ていつたら、政府は既に當時議會を解散する腹を定めてゐて大臣と政務次官も夫れどころじやないようであつたが、例ひ議會が解散になるとしても國の大切な事務的計畫を無視する譯けには行かぬと種々說いたところ松野政務次官はまあ兎も角僕は盲印を押すからと云ふことであつた。

と、氏は當時この大計畫の接衝についていろ〳〵面白い話しを語られた、その中で當時內務省の總豫算は約一億八千萬圓位であるのに拘らず例ひ繼續事業とは云ひ土木計畫に三億八千萬圓といふ莫大な經費を計上するのは中橋內相は高橋藏相を苦しめるものであると云つて中々聞かなかつたことや、氏はこれに對して前の若槻內閣の際井上藏相の極端なる緊縮財政方針のために世擧げて不景氣のどん底に陷入り所謂世間が暗くなつて國民に生氣がないから政友會內閣はその傳統からして積極政策をとつて民心に活を入れる必要あり夫れには益々殖產興業の發達を促す必要上この計畫を力說したところ內相は土木局長は純然たる事務官でなくて政治家じやなあ……と云はれたと大笑で種々語られたが更に言葉を次いで。

或る時松野政務次官は僕に對してあまり土木局のことは大臣にやかましく云はずに居つた方は却てよい結果を得る。今の大臣は嘗て商工大臣であつた時に他省の大臣と大藏大臣との間を豫算關係で仲裁したこともあり又その時にも自分の省の豫算については一言も云はなかつたので商工省の豫算を全部頂戴したこともあるからとのことであつたが、僕はその際に時代も異つてゐるが商工省は豫算全部頂戴しても僅か一千萬圓位である、內務省の豫算とは比較にならぬと云つたこともあつたが臨時議會に提出せねばならぬから大藏省にこの計畫豫算を送付し

て置く必要もあつた。

と、とゝで又種々話されたのであつたが。

結局この大計畫は中橋内相も高橋藏相も認めたのであつたが、愈ゝ臨時議會の時には犬養首相があの五・一五事件に倒れて後繼内閣である齋藤内閣に依つて開かれたが、この時は僕の土木局長は最早や唐澤君と代つて廣島縣知事となつて赴任してゐた、この齋藤内閣で山本内相の下で僕の計畫した産業開發の土木計畫は根本的に改まつて四億五千萬圓の大豫算で三ケ年計畫で農村救濟臨時土木事業となつて現はれて國費が四分の三を總花主義でバラ散き所謂インフレ政策を取つたのであつた。

とて當時の模樣を縷々語られた。

この三ケ年計畫の終了の十年四月の地方官會議で堀切内閣書記官長から首相の訓示のあとで各大臣の面前で各地方長官は地方の事情に約十五分間づゝ報告し且意見があれば述べるやうにとの話であつた。夫れで僕は、第一に内務系統の官吏の身分調査をカード組織にして科學的に調査して各地方長官から申告すること、第二は地方長官の若干を勅選にすること、第三に最早や三ケ年計畫の結果農村は生氣を恢復して相當發展して來たインフレの效果は擧げてゐる、故に農村救濟策はもうやめて土木事業は産業開發を主眼として本來の使命に歸へること、この三つの點を意見として云つたところ、翌日の内務省所管會議で岡田東京、縣大阪、白根兵庫、香阪愛知等の各府縣知事は續々と起つて各々農村救濟土木事業打切の反對の聲を擧げたのであつた、當時僕はこれに反對の知事達は何人あるかと數へてゐたら十餘人ばかりあつた、その又翌日の會議で何んでも必要なる範圍で引續いて救濟を望むとの決議をするから僕に賛成して捺印承認してくれとのことであつたが、僕は東北地方の或る縣の如き貧弱なる縣にはその必要があらうが知事と雖も國家全體から觀測して最早や今日の狀況はその必要がなく所謂重點主義で行つた方がよいと思ふから僕はこの決議案にも賛成せなんだ有樣であつた。

と、氏はこゝで國家的見地からその當時の模様を詳細に述べられ更に話題は二三他の方面にも轉じたが、傍らから見てゐると非常に多忙のやうであつたから筆者も餘り永居はどうかと思ふて、これ位にして辭したのであつた、これが湯澤氏の談話の大樣であるが多少誤つてゐたならば夫れは筆者の聞き違へであることを斷つて置く。

湯澤氏の土木局長時代

偖て湯澤氏が宮城縣知事から再び本省に戻つて故丹羽七郎氏のあとを襲うて土木局長の椅子に据つたのは、世は犬養内閣で中橋德五郎氏が内相の時、昭和六年十二月十八日である。そうして唐澤俊樹氏に讓つて再び牧民官として廣島縣に赴任したのは翌七年の六月廿八日であつた。既にその時は内閣は齋藤實氏を首班とする所謂齋藤内閣であつたが、氏の在任は僅に六ケ月と十五日の短期間である、如何なる手腕力量のある人物でもこのやうな僅かな間では抱負もこれを實行に移すには餘りに期日が短かすぎる、從つて計畫も實行も出來得るものではない、併乍ら氏はこの短かき期間内でも非常に活動して相當の成績を擧げてゐる、犬養内閣が例の積極政策で諸般の事業を計畫し殊に産業振興土木事業を新に始めんとする時にあつて、氏はこの積極政策の風潮に來つて從來からの幾多の懸案を解決した、殊に氏が曩に語つたやうに産業振興のために土木五ケ年計畫や中小河川又は地方港灣の改修に對する補助制度の確立や直轄道路河川事業に對すること等を時の政府の意途に適合するやうに改訂更正してこれを實現せしめたことも全く氏の手腕と努力の結果である、豫算關係ばかりではなく從來の内閣が惱み拔いてゐた例の庄川の問題も圓滿にこれを解決せしめて行政官としての妙味を見せてゐる、尙ほ氏が土木局長時代であつた、昭和六年の末から同七年に亙つて改修工事を起工した河川は治水事業概要に依つて見ると、川内川は舟運の便は克く地方民が利水運航の惠澤に浴するところ極めて多いけれども又一面水患を被むること激甚であつたから、この川を工費三百六十萬餘圓で内地方負擔額百二十四萬餘圓として昭和六年度からその起工に着手してゐ

る。又安倍川は靜岡市の西部を貫流して其の沿川は平地面積は左程廣大とは云へないが氣候溫暖地味豐饒で產業は發達してゐる靜岡市街を抱擁してゐるから洪水の脅威から脫せしむるは緊要事であるのでこれが改修工事は氏が在任中の昭和七年度から工費四百八十萬圓內地方負擔百六十六萬餘圓で昭和廿一年度竣工豫定でその工事に着手してゐる、更に廣島市內に於て六ケ川に分派して廣島灣に注ぐ太田川は其地方を利するところ大なるけれども他面洪水の脅威を全市に與ふることも亦少くないばかりではなく廣島市の都市計畫事業の遂行は各派川の根本治水の確立を前提とするの必要があるので、この方面からも改修の急施が叫ばれてゐた位であるが、これも亦氏の在職中の昭和七年から竣工豫定を同二十三年度として工費千五百萬圓でその內地方負擔は五百六萬餘圓として改修工事に着手してゐる、更に多摩川の上流も本川二子橋以下は着々その改修工事は進捗して既に湯澤氏の土木局長在任中には九分通り以上竣工してゐたが其上流部は河幅廣濶である箇所があつて洪水亂流して所々に寄洲が出來て、それがために河狀は著しく惡化して沿川耕地の被害は益々增大するので昭和七年度から十二ケ年度事業として工費三百九十萬圓を計上して內地方負擔額は百六十三萬餘圓で起工に着手してゐる。

當時の財界不況と土木關係

湯澤氏が土木局長として就任した昭和六年頃は數年以前からの財界の不況に基因し、殊に若槻內閣の井上藏相に依つてお手盛りされたる極端なる緊縮方針は一層これに拍車をかけて、當時經濟界は益々萎靡して不景氣の聲は全國津々浦々まで滿ち失業者は到るところに簇出してゐた時代であつた、夫れで政府は氏の土木局長就任の昭和六年度に於ては「氏の土木局長就任は同年の十二月」これが救濟の必要と道路改良の急務とに鑑みて、失業救濟道路改良豫算を設けて新に國道工事國直轄施行の制度を實行して以て政府自ら國道を改良し又地方をして府縣道の改良事業を起興せしめつゝあつた時である、氏が在職中三ケ年繼續三億餘萬圓の土木事業の計畫は第六十回帝國議會に提案する方針で

あつたがこの議會は政府最高政策のために解散となつたので自然豫算も成立せなかつたが道路問題に付いては失業救濟道路改良事業は中止する譯けには行かぬので、前年度の道路改良費豫算を執行して尙前年度失業救濟道路改良費豫算中で四、五兩月分として國道改良費二百九十餘萬圓、府縣道改良費補助費百五十萬圓、其の外北海道國道改良費十六萬餘圓及び京濱都市應急失業救濟事業費補助百三十七萬餘圓計五百九十五萬餘圓を支出して失業者を救濟すると同時に道路改良の促進を計つてゐる、併乍ら失業對策としては寧ろ積極的に事業を興して産業の進展を圖つて失業の防止とその救濟に乘出すことが最も必要なので、こゝに新に産業振興道路改良事業を計畫して自動車の發達によつて要求せらるゝ道路改良の急に應じ以て自動車の機能を十分に産業の進展に利用するために、昭和七年度以降五ケ年計畫に亙る國道工事直轄の制度確立を見るに至つたのである、更に港灣の修築等もあるがこれは頁の關係上省略することゝして、以上は大體氏の土木局長時代及びその前後に於ける道路河川等所謂土木關係事業仕事の大略である。

目的達成には指導者に人材を要す

此頃は時局の關係でもあるが、何々會と云ふやうな名稱の付く會が次から次にと雨後の筍のやうに出來てくる、その內には統制團體もあれば教養團體もあり國民は實に目まぐるしい、然し最も國民の關心を引いたのは翼賛會であつたが、同會は既に成立一周年を迎へることになつた今日一年前の大政翼賛會が國民に對する魅力に非常な違ひがあり、又國民の翼賛會に對する關心にも大いに異なるものがあるやうに感ずるのである、一般には改組後の翼賛會は只だ單に豫算の多い精動のやうなものだと考へて居る人々は多いやうである、現に筆者の知合ひの人々にもかやうに思うてゐる人が多いのであるが、この翼賛會に對する國民の關心が薄らいだ時に大日本興亞同盟といふ又一つの會が生れたが、この翼賛會に依つて行はれた興亞團體の統合についてはいろ〳〵の意味でそれに期待をしてゐるものも多くあつた、然るにその實際は興亞同盟といふ會は徒らに興亞

團體を統合した所謂世の名士といふ人々の顏を集めて形を整へたのに過ぎないものであつて興亞運動の統一と組織化並に其の强力な展開に對して同盟として何等見るべき成果も擧げてゐない現狀である、これに對して筆者は某氏に遇ふて時局談を交換してゐる時に「この頃の翼賛會が魅力を失ひかゝつて居り、又興亞同盟が吾人の期待外れとなつた時に當つて、又々翼賛壯年團が翼賛會の手で發足せんとしてゐるが、これは誠に結構のことであるだけにせめてはこの翼賛壯年團だけでも健全に發展させたいものである、併しその組織要綱や方針等を見ると現下の青年を感奮興起せしめるものに乏しく結局ビールの氣の抜けたやうに半官製の壯年團が生れそうな印象を與へてゐる云々と筆者に語つたが、筆者も誠に同感であつた、如何なる時局對應策に緊要な會の成立でも亦その仕事するに當つても健全に育生して以てその目的を達成するの要諦は實にその指導者の人物如何にある、換言すればその指導者に申分のない人材を得られるか否かが岐れ道である。と思ふのである。

大なる人物は人材を集中す

想起すると三國史に「肝腦地ニマミルトモ、コノ御思ハ報シ難シ」と云ふことを書いてゐるが、これは玄德幕下の驍將であり且智將であつた、趙雲が諸將綺羅星の如く居揃ぶ中で劉備玄德に涙を流して感奮退かつた時のことである、玄德が魏の曹操と戰つて大敗し妻子を見失なつた時、趙雲は生命を思はず單騎敵の大軍の中に突入して戰場をあちらこちらと馳せ廻つて漸くにして玄德の實子阿斗を探し出し公子を懷に抱へて敵の重圍を突破して歸つて玄德の面前にこの阿斗公子を渡した時のことである、玄德は僅か三歲のこの實子を受取るや否や其の瞬間に諸將の面前で公子を地に捨てゝ云ふには。

父子の情は予も亦克く知るが、思ふに趙雲の如き人物は又とこの世で得られるものではない、それをこの一小兒のために危く戰死させるところであつた、一子はまた生むも得られるが、良き人物は又と得難いものである、諸將もこのわしの心を怪しんでくれるな。

と、のことであつた、これが卽ち「士は已れを知るもののために死す」との意味である、又玄德は大風雲を幾度か冒して人材を求むべき山間僻村に諸葛孔明を尋ねるが如き玄德が如何に人材を愛し又人材を欲したかが窺れるのである、更ればこそ當時曹操、孫權と列び立ち文武雙絶の英雄たることが出來たのである、魏の梟雄曹操も亦あれ程の大事業を遂げる男だけあつて、彼が人材を求むる欲心は寧ろ夫れ以上を通り越して人材に耽溺するとまで云はれてゐる、彼が絶倫にして逸群の髯將軍、關羽を引留めやうとして如何に優遇し苦心を凝らしたかは三國史を讀む者の等しく肯定するところであるが、これ又熾烈なる人材欲から出る心情である、それでも關羽は玄德の所在が知れると急遽曹操に暇乞ひをして勇躍玄德の下に走つたが、かやうに古今の英傑とか大人物とか云はるゝ人物はその周圍に人材を集めることに苦心してゐる、夫れなればこそあのやうな大事業を成し遂げて史的人物たり得るのである、現に獨逸の大救世主ヒツトラーは其の周圍にゲンベルスを始め幾多の人材がヒツトラーに依つて集められたればこそ歐洲の再建設否世界新秩序の再建などと云ふ大事業が遂行されんとしてゐるのである。後世の史家は必ずやこれを無視せぬであらう。湯澤氏の周圍には果して人材が集中されてゐるか筆者は知らないが、要は人の上に立つものはその周圍に人材を集中出來得るか否やが、その人物の程度を測定する一種のバロメーターとなる譯けである。

事業の成否は人物に在り

湯澤氏の統率する大日本產業報國會が世界は未曾有の轉換期に際會して我國も亦東亞新秩序の建設に任じ進んで世界新秩序の完成に一路邁進せんとするに當つて愛國の至情を產業報國運動に結晶して、曠古の國難を克服し以て永遠の皇國產業道を樹立せんとする重大使命を帶びてゐる、誠にその責務は大なりと云はねばならぬ、さり乍らこれが目的達成は却々容易の業ではない、併し筆者は前述したやうにその指導者の人物如何に依つては左程困難のことではない、凡て物事の成就如何は其の人物にありと云はれて居

る、産業報國會は幸にして湯澤氏のやうな人材を得てゐる。恐くは今後に於てもその創立宣言や綱領を天下に向つて發表したところに副ふて着々實績を擧げて行くであらうが、これはホンの一笑題に過ぎないが、最近或る工場で急に能率が低下したので其の事情を調べて見ると工場員のため屢々時局講演會を開いたことが原因となつてゐることが判つたさうである。即ち時局の重大性を說き國民の緊張を促す趣旨の講演會を度々開いたら時局を非常に憂慮するやうになり却て能力の低下を來したといふことである、夫れで工場の幹部は更めて工場員を集めて軍艦の戰鬪行動については指揮者が絕えず敵艦を探索して決定するのであるから乘組員は一切を指揮者に委ねて各々その職責を盡して居ればよいのである。と例を引いて我々は與へられたる仕事に全力を盡すやうにしようと話したら、工場員もこれを諒解して仕事の能率が再び上るやうになつたとのことであるが、最近わかり切つたことを鹿爪らしく說いて、國民の緊張を促す時局講演會なるものゝ效果の一例である。今日國民は何れも緊張して所謂職域に奉公してゐる、從つてこの國民を一層緊張せしめんとする目的を以て開く時局講演會等はその內容や方法を充分注意してやらぬと却て逆效果を來たすことを考へる必要もあるように思はれる。……と筆はこゝまで脫線したが、現下未曾有の重大時局に於て氏も亦國家が要望する一人材であることだけは太鼓印を押してよいと思ふのである。

附記この原稿を既に印刷に廻したあとで、第三次近衞內閣は國策遂行の方途に關して意見の不一致を來して退陣した、次いで東條陸軍大將を首班とする後繼內閣が生れたが、この內閣には首相自ら陸相と內相を兼攝すると共に湯澤氏は次官となつて事實上の大臣格として非常時局の內務行政の衝に當ることとなつた、既に氏は大臣級の人物であることは間違はないから當然過ぎる程當然であるが即ち非常時局下の人材たることを一層立證して餘りがある。